

「テルーの唄」

歌 / 手島 葵
作詞 / 宮崎吾朗 作曲 / 谷山浩子
編曲 / 寺嶋民哉

夕闇迫る雲の上 いつも一羽で飛んでいる
鷹はきっと悲しかろう
音も途絶えた風の中 空を掴んだその翼
休めることはできなくて
心を何にたとえよう 鷹のようなこの心
心を何にたとえよう 空を舞うよな悲しさを

雨のそば降る岩陰に いつも小さく咲いている
花はきっと切なかろう
色も霞んだ雨の中 薄桃色の花びらを
愛でてくれる手もなくて
心を何にたとえよう 花のようなこの心
心を何にたとえよう 雨に打たれる切なさを

人影絶えた野の道を 私とともに歩んでる
あなたもきっと寂しかろう
虫の囁く草原を ともに道行く人だけど
絶えて物言うこともなく
心を何にたとえよう 一人道行くこの心
心を何にたとえよう 一人ぼっちの寂しさを



挿入歌「テルーの唄」について

本作品の主題歌。挿入歌を歌うのは、圧倒的な歌声を持つ無名の新人・手島 葵です。予告編などで流れるのは挿入歌「テルーの唄」。萩原朝太郎の詩「こころ」に着想を得た吾朗監督が作詞し、NHK「みんなのうた」などでも知られる谷山浩子が作曲しています。
心深く沁みいるその歌は、懐かしく切ない現代の民謡（フォークソング）となるでしょう。

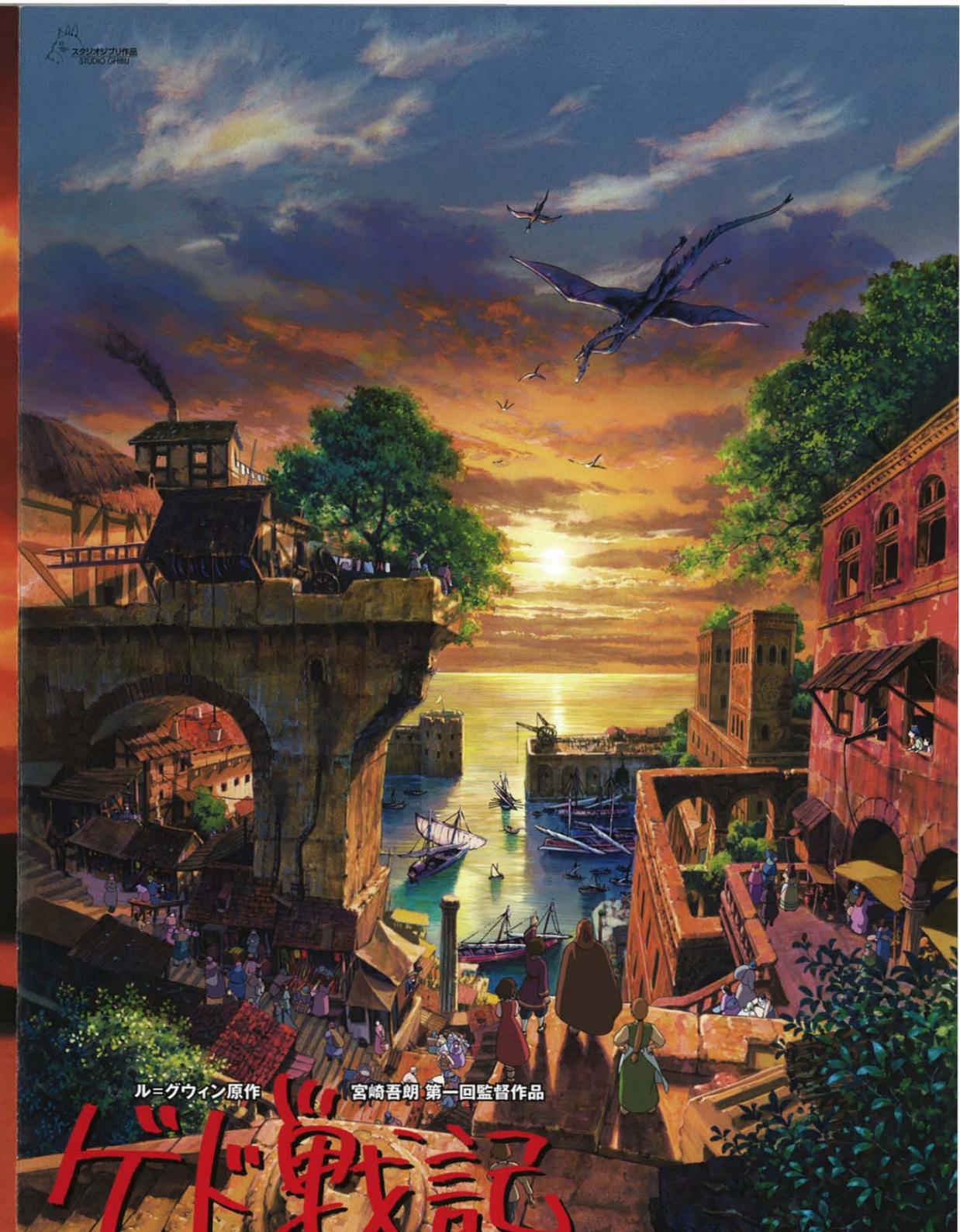


見えぬものこそ。

父さえいなければ、
生きられると思った。

アレン / 岡田准一 ● テルー / 手島 葵 新人 ● ゲド / 菅原文太
田中裕子 ● 小林 薫 / 夏川結衣 / 香川照之 ● 内藤剛志 / 倍賞美津子 ● 風吹ジュン

原作 / アーシュラ・K.ル=グウィン「ゲド戦記」(講談社文庫) ● 作画参考 / 「シュナの館」(宮崎 賢一・徳間書店刊)
脚本 / 宮崎吾朗 ● 監督 / 宮崎吾朗 ● 音楽 / 寺嶋民哉 (響) ● 主題歌 / 「唄の歌」 ● 挿入歌 / 「テルーの唄」 ● 歌 / 手島 葵 (アリス) ● プロデューサー / 鈴木敏夫
スタジオジブリ / 日本テレビ / 東映 / 情報系DYP・ティズニー・三響音楽・東宝 提携作品 ● 特別協力 / ローソン・長尾新屋 ● 監製 / 東宝



ル=グウィン原作 宮崎吾朗 第一回監督作品

ゲド戦記

TALES from EARTHSEA

作品紹介

少年の敵は、彼自身の中にいた。

親は、私を大切に育ててくれた。衣食住、満ち足りた環境の中に自分はいる。しかしなぜか、息苦しい。なぜか、目の前が開けない。“自分で生きている”という実感がない。それは、親の用意した世界の中で自分が生かされているから。人は、自分が作った世界の中でしか生きられない。親さえいなければ、もっと自由に生きられる。本当の自分になれる。

この映画の主人公アレンも、そんな少年のひとりだ。彼は、賢王の誉れ高い国王と王妃を父母に持ち、何不自由のない人生を約束されていた。しかし、彼の心に闇が生じた……。少年の敵は、彼自身の中にいた。

バランス世界の均衡が崩れつつある。

物語の舞台は、多島海世界“アースシー”。西海域の果てに棲む竜が、突如、人間の世界である東の海に現れ、それと対応するかのようには、世界ではさまざまな異変が起こり始めた。世界の均衡が崩れ、人々の頭が変になっていく……。災いの源をつきとめる旅に出た大賢人ハイタカ（真の名:ゲド）は、心に闇を持つエンラッドの王子アレンと出会う。少年は父王を刺し、国を捨てたのだった。

ジブリ20年越しの企画、ついに……

『ゲド戦記』（清水真砂子訳・岩波書店刊）は、『指輪物語』『ナルニア国物語』と並び称されるファンタジー文学の傑作。米国の女性作家アーシュラ・K.ル=グウィンの描くこの物語は、1968年から2001年にかけて6巻が出版され、今では世界19カ国で翻訳出版されています。日本でも76年に第1巻「影との戦い」が出版され、現在シリーズの合計部数は100万部を超えます。これまで数多く映画化の話があったそうですが、原作者が拒否。実は、かつて宮崎駿監督も映画化を打診したが断られたという経緯もあります。以来、ジブリは20数年にわたり企画を温め続け、それと同時に「風の谷のナウシカ」(84)から「ハウルの動く城」(04)にいたるまで、『ゲド戦記』は宮崎駿作品に大きな影響を及ぼしてきました。ところが、『千と千尋の神隠し』(01)が米アカデミー賞長編アニメーション部門賞を受賞するなど世界の映画界で高い評価を得たこともあり、3年ほど前、突然原作者のほうから映画化の打診が舞い込んできたのです。

監督は、宮崎吾朗

映画「ゲド戦記」の監督を務めるのは、宮崎吾朗。アニメーション映画監督・宮崎駿の長男である宮崎吾朗は、設計事務所勤務を経て三鷹の森ジブリ美術館の総合デザインを手がけるなどし、'01年10月の開館より'05年6月まで同美術館の館長を務めました。本作の企画に際しては、当初オプザバーとして関わっていましたが、自らストーリーを構成し絵コンテを執



筆するなど、しだいに制作の先頭に立つようになります。そして、「美術館を造るにあたってオヤジと渡り合い、その強権を跳ねのけた吾朗君ならできる」と、鈴木敏夫プロデューサーからその手腕と才能を認められ、監督に就任しました。

脚本は、宮崎吾朗と、ジブリ作品「海がきこえる」(93)の丹羽圭子が共同執筆。音楽は、独特のオーケストレーションで評価を受け、『半落ち』(04)など数多くの映像音楽で才能を発揮する寺嶋民哉が担当します。

主人公には岡田准一。豪華キャスト陣が結集。

主人公のアレン役には、岡田准一、『木更津キャッツアイ 日本シリーズ』(03)、『東京タワー』(05)をはじめ、今年に入っても「花よりもなほ」(是枝裕和監督)など立て続けに主演映画が公開され、ここ数年、俳優としての評価を高めるなか、ジブリ作品でもその存在感をアピールすることになります。ヒロインであるテルー役には、主題歌、挿入歌を歌う手嶌 葵、彼女の歌声に惚れ込んだ吾朗監督が抜擢しました。ハイタカ役には菅原文太、『千と千尋の神隠し』の爺爺役も記憶に新しいですが、今回は一転して、世界の混乱の謎に迫る“大賢人”を演じることに。そして、“永遠の命”にとりつかれた悪役を演じる田中裕子をはじめ、風吹ジュン、小林 薫、夏川結衣、香川照之、内藤剛志、倍賞美津子ら、かつてない豪華キャストが脇を固めます。

少年アレンと大賢人ハイタカの旅を通して、「この時代を、まっとうに生きる」ことの意味を世に問う、スタジオジブリ最新作「ゲド戦記」にご期待ください。



物語

多島海世界「アースシー」の東海域。

物語の舞台は、多島海世界“アースシー”。荒れる海の中をローリングしてくる一隻の帆船。船長は風の司に海を鎮めるよう命じるが、司は、どうしても海と風の真の名を思い出すことができない。そして、突如、暗雲の中から二匹の竜が現れる。二匹は共食いをしていた。西の果てに棲む竜が、人間の住む世界である東海域に現れ、さらに共食いをするなどあつてはならぬことだった。

世界の均衡が崩れつつあった。

ハイタカ（真の名:ゲド）は、世界に災いをもたらすその源を探る旅の途上にあつた。かつて、血気にはやる傲慢な山羊飼いの少年だったハイタカもいまや壮年となり、世界でもっとも偉大な魔法使い、「大賢人」と呼ばれていた旅の途中、彼はエンラッドの王子アレンと出会う。父王を刺し国を出た少年は、「影」に追われていた。世界の均衡を崩し、人の頭を変にする災いの力はアレンの身にも及んでいたのだ。影から逃げまどい、心の闇と向き合うことのできないアレンの姿は、まるで若き日のハイタカのようなだった。

谷を下り、山をめくり、農民が土地を捨てたいくつもの廃墟を抜け、二人は人々が崩れかけた遺跡に巣くうように暮らす都城、ホート・タウンにたどり着く。

多くの人でごったがえす街では、職人は技を忘れ、売られているものはどれもまがい物ばかり。奴隷の売買が行われ、路地を一步入れればハジア患者がたむろしていた。人々はせわしなく動き回っているが、みな目的を失っているように見えた。その目に映っているものは、夢か、死か、どこか別の世界だった。

探索を進める二人は、ハイタカの昔なじみであるテナーの家に身を寄せる。かつてテナーは少女の頃、アチュアンの暗黒の墓所を守り続けていた巫女であり、ハイタカがそこからエレス・アクベの腕輪を奪還した際、彼によって自由と光の世界に連れ出されたのだった。そして、彼女の家には、顔に火傷の痕の残る少女テルーが住んでいた。親に捨てられたテルーは、心に闇を持ち時折自暴自棄になるアレンを嫌う。

日々畑仕事に汗を流し、自然との関わりの中で、世界の森羅万象がすべて均衡の上に成り立っていることをハイタカから諭されるアレン。そんな彼にテルーも、しだいに心を開くようになる。しかしその間にも、アレンの影への恐怖はつり、影に追われる夢にうなされるようになる。

ハイタカは、クモという魔法使いが生死両界の扉を開け、それによって世界の均衡が崩れつつあることを探り出す。「ハブナーのクモ」と呼ばれたその男は、その昔、人が金を払いさえすればバルンの『知恵の書』を使い、望み通りの人間をあの世から呼び出していた。師の魂を呼び出され憤った若き日のハイタカは、泣きわめいて抵抗するクモを無理矢理黄泉の国まで連れて行き、恐怖の底に突き落とした。その後クモは、改心を誓って西へと去ったが、その心の底ではハイタカへの復讐を誓っていたのだった――。



物語

多島海世界「アースシー」の東海域。

物語の舞台は、多島海世界“アースシー”。荒れる海の中をローリングしてくる一隻の帆船。船長は風の司に海を鎮めるよう命じるが、司は、どうしても海と風の真の名を思い出すことができない。そして、突如、暗雲の中から二匹の竜が現れる。二匹は共食いをしていた。西の果てに棲む竜が、人間の住む世界である東海域に現れ、さらに共食いをするなどあつてはならぬことだった。

世界の均衡が崩れつつあった。

ハイタカ（真の名:ゲド）は、世界に災いをもたらすその源を探る旅の途上にあつた。かつて、血気にはやる傲慢な山羊飼いの少年だったハイタカもいまや壮年となり、世界でもっとも偉大な魔法使い、「大賢人」と呼ばれていた旅の途中、彼はエンラッドの王子アレンと出会う。父王を刺し国を出た少年は、「影」に追われていた。世界の均衡を崩し、人の頭を変にする災いの力はアレンの身にも及んでいたのだ。影から逃げまどい、心の闇と向き合うことのできないアレンの姿は、まるで若き日のハイタカのようなだった。

谷を下り、山をめくり、農民が土地を捨てたいくつもの廃墟を抜け、二人は人々が崩れかけた遺跡に巣くうように暮らす都城、ホート・タウンにたどり着く。

多くの人でごったがえす街では、職人は技を忘れ、売られているものはどれもまがい物ばかり。奴隷の売買が行われ、路地を一步入れればハジア患者がたむろしていた。人々はせわしなく動き回っているが、みな目的を失っているように見えた。その目に映っているものは、夢か、死か、どこか別の世界だった。

探索を進める二人は、ハイタカの昔なじみであるテナーの家に身を寄せる。かつてテナーは少女の頃、アチュアンの暗黒の墓所を守り続けていた巫女であり、ハイタカがそこからエレス・アクベの腕輪を奪還した際、彼によって自由と光の世界に連れ出されたのだった。そして、彼女の家には、顔に火傷の痕の残る少女テルーが住んでいた。親に捨てられたテルーは、心に闇を持ち時折自暴自棄になるアレンを嫌う。

日々畑仕事に汗を流し、自然との関わりの中で、世界の森羅万象がすべて均衡の上に成り立っていることをハイタカから諭されるアレン。そんな彼にテルーも、しだいに心を開くようになる。しかしその間にも、アレンの影への恐怖はつり、影に追われる夢にうなされるようになる。

ハイタカは、クモという魔法使いが生死両界の扉を開け、それによって世界の均衡が崩れつつあることを探り出す。「ハブナーのクモ」と呼ばれたその男は、その昔、人が金を払いさえすればバルンの『知恵の書』を使い、望み通りの人間をあの世から呼び出していた。師の魂を呼び出され憤った若き日のハイタカは、泣きわめいて抵抗するクモを無理矢理黄泉の国まで連れて行き、恐怖の底に突き落とした。その後クモは、改心を誓って西へと去ったが、その心の底ではハイタカへの復讐を誓っていたのだった――。



宮崎吾朗



宮崎吾朗監督は、父宮崎駿の長男。幼少期から父の監督作品を観て育ち、父の死後、父の遺志を継いで監督に就任。本作は父の死後10年経った宮崎吾朗が初めて手がけた作品。

宮崎吾朗監督は、父宮崎駿の長男。幼少期から父の監督作品を観て育ち、父の死後、父の遺志を継いで監督に就任。本作は父の死後10年経った宮崎吾朗が初めて手がけた作品。

宮崎吾朗監督は、父宮崎駿の長男。幼少期から父の監督作品を観て育ち、父の死後、父の遺志を継いで監督に就任。本作は父の死後10年経った宮崎吾朗が初めて手がけた作品。

私がル=グウィンさんの「ゲド戦記」シリーズに出会ったのは、今から20年以上も前、まだ高校生の頃だったと思います。当時の私が最も心引かれたのは、第1巻と第2巻でした。第1巻では、ハイタカの傲慢さと挫折、そして自身の影との合一に自分を重ね、第2巻では、テナーの暗い墓所からの開放に喜びと悲しみを感じました。

ところが、映画の企画に参加するために、あらためて「ゲド戦記」を全巻読み直した時、私は第3巻、第4巻、そして外伝に強く心引かれることに気づき、驚きました。私自身が年齢を重ねて変わったこともあるでしょうが、私たちを取り巻く状況が大きく変わったことがその最も大きな理由だと思います。

実在感を失った街ホート・タウンに生きている

今、私たちの暮らしている世界は、まるで第3巻に登場するホート・タウンやローバネリーのようです。みな、必死にせわしなく動き回っていますが、それは目的があつてのことではないように見えます。目に見えるもの、見えないもの、それら全てを失うことを、ただただ恐れているようです。人々の頭がおかしくなってしまった感じです。

一つひとつ例を挙げることはしませんが、その原因は国内外の様々な社会状況の激変にあるのは明らかです。けれど、どうすれば社会が良くなるのが、目指すべき方向は誰も提示できずにいます。そして大人たちは誇りや寛容さ、いたわりの心を失い、若者たちは未来に希望を見出せず、無力感におそわれています。

結果、生きることの現実感は失われ、自分や他人が死ぬことの現実感も失われています。自分の存在を曖昧にしか感じられないのならば、他者の存在も希薄にしか感じられないのは当然で、減らない自殺や理由なき殺人の増加は、その象徴に思えます。

宮崎吾朗監督は、父宮崎駿の長男。幼少期から父の監督作品を観て育ち、父の死後、父の遺志を継いで監督に就任。本作は父の死後10年経った宮崎吾朗が初めて手がけた作品。

生と死、そして再生の物語

そうしたことを目の当たりにしながら、私たちはこの時代をどうやって生きていけばよいのだろうかと考えていたとき、映画「ゲド戦記」の企画が始まりました。「ゲド戦記」第3巻を今回の映画の中心にしようと考えたのは、このためです。世界の均衡が崩れつつある原因が人間の内にあること、その根源を辿れば生と死の問題に行き着くこと、そこに、私たちにいま最も必要なテーマがあると思うのです。

第3巻の中では、繰り返しハイタカとアレンの対話が描かれています。アレンの問いはそのまま私の問いであり、ハイタカの答えは私の胸に深く落ちました。もしかすると、ハイカタの答えは、私のアレンへの答えだったのかも知れません。なぜなら、私はハイタカとアレンのちょうど中間の年齢だからです。かつて自分が少年だったときより、ハイタカの言葉が理解でき、一方でアレンの気持ちもわかるのは、自分の年齢と関係があるのでしょう。その意味で、第3巻が、老境を迎えようとする男が若者へハトンを渡そうとする物語でもあることも、私が第3巻を選んだ理由なのだと思います。

また、第4巻、外伝とつながる後期の作品の中で描かれている「人間の再生」に、私は深く打たれました。それは、魔法を失ったハイカタとテナーの再出発であり、傷ついた少女の再生であり、傲慢な魔法使いの再生であり、若者たちの出会いと新たな

宮崎吾朗監督は、父宮崎駿の長男。幼少期から父の監督作品を観て育ち、父の死後、父の遺志を継いで監督に就任。本作は父の死後10年経った宮崎吾朗が初めて手がけた作品。

門出です。そこに共通するのは、男女が対等に支えあって生きる姿であり、若者はもちろん年齢を重ねた人間にも回復と再生はあるのだという人間肯定の視点だと思いました。さらに加えるならば、そこには必ず大地と共に生きる暮らしがあります。

「私たちが行くべき道を見失っているのは、過度に文明化し、都市化した暮らしの中で、世界の全ては予見可能でコントロールできるのだと思込んでいるからではないか」と思います。人間の力ではどうにもならない自然の流れがあることを知り、それを受け入れていくことで、人は心豊かに生きているのではないかと、そんなふう考えています。

ハイタカたちと旅に出る

こうして、私は「いま、まっとうに生きるとはどういうことか?」という自分自身の問いを「ゲド戦記」に投げかけ、ハイタカをはじめとする多くの登場人物たちの声に耳を傾け、再び問い返すことを続けてきました。それがこの映画の主題になっていることは間違いありません。

まもなく映画は完成します。私は、ずいぶん長いあいだハイタカやアレンたちと旅をし、話しをしてきたような不思議な気持ちです。

今は、この映画を観ていただいた皆さんが喜んでくださることを、そして叶うことならば、皆さんがそれぞれにハイタカたちと旅をされることを願ってやみません。

^[1] 宮崎吾朗監督は、父宮崎駿の長男。幼少期から父の監督作品を観て育ち、父の死後、父の遺志を継いで監督に就任。本作は父の死後10年経った宮崎吾朗が初めて手がけた作品。

^[2] 宮崎吾朗監督は、父宮崎駿の長男。幼少期から父の監督作品を観て育ち、父の死後、父の遺志を継いで監督に就任。本作は父の死後10年経った宮崎吾朗が初めて手がけた作品。